

を行ったのでその成績を報告した。

日本病理剖検輯報によると1972年から1976年までの5年間に全国で行われた剖検総数は、116,070例で腫瘍(癌)の剖検総数は63,341例である。このうち舌癌(全て扁平上皮癌)剖検数は年度別にそれぞれ44例, 50例, 56例, 50例, 53例, の合せて253例(男169例, 女83例, 性不明1例)であった。これは全部検数に対する0.22%, 全腫瘍(癌)剖検例に対する0.40%である。年代別にみると60歳代が77例で最も多く50歳代が54例, 70歳代が42例, 40歳代が33例で以下30歳代21例, 20歳代が12例, 80歳代が10例と続いていた。

発生部位については記載のないものが166例あり, 残りの症例(84例)についてみると舌縁が最も多く33例(39.2%)で舌根が21例(25.0%), 舌尖4例(4.8%)舌背3例(3.6%)の順であった。また左右差についてみると男では左が17例, 右が24例, 女では左が15例, 右が7例で, 男では右側が, 女では左側に発生した症例が多かった。

転移については記載のあった231例についてみると剖検時臓器のみ転移のみられた症例は56例(24.2%), リンパ節にのみ転移のみられたのは18例(7.8%)で臓器とリンパ節に合せて転移のみられたのは126例(54.5%)であった。しかし転移なしと記載されているものが31例(13.4%)もあった。また臓器転移では肺が最も多く, 82例(35.5%)にみられ, 次いで頸部軟組織63例(27.3%), 咽頭42例(18.2%), 甲状腺32例(13.9%), 腎26例(11.3%), 肝24例(10.4%), 心23例(10.0%), 皮膚21例(9.1%), 喉頭20例(8.7%), 副腎19例(8.2%)などが多かった。リンパ節では頸部が101例(43.7%)で最も多く, 気管周囲26例(11.3%), 肺門20例(8.7%), 鎖骨上窩15例(6.5%), 縦隔15例(6.5%)となっていた。

質 問: 小川 邦明(県立中病歯科口腔外科)

舌癌は全体の癌のうち2~5%程度の発生と記憶しておりますが, 先生のDataでは全癌のうち何%程度でしたか。また年別にみると舌癌は多くなっている傾向にあるのかどうか, 御教示をお願いします。

質 問: 石橋 寛二(第二補綴)

舌癌の発生と義歯あるいは金冠との関連について報告例がございましたら教えて下さい。

質 問: 工藤 啓吾(第一口外)

死因は何が多かったのでしょうか。

回 答: 演者

小川邦明先生に対する回答:

今回は臨床的な成績については検索しておりませ

ん。剖検例でみる限りではこの5年間で舌癌は253例で全腫瘍剖検例の0.40%を占めていました。年度別に舌癌剖検数をみると44, 50, 56, 50, 53例で著大な増加はみられません。

石橋寛二先生に対する回答:

日本病理剖検輯報には義歯などの状態についての記載がありません。

工藤啓吾先生に対する回答:

舌癌症例の死因については大変興味ある問題ですが今回はこれについては検討しておりません。次の機会にご報告致します。

座長 高江洲 義 矩

#### 演題4 Str. mutans の菌体凝集能欠損株の諸性状特に Glucan 産生について

○田近 志保子, 平田 佳子, 本田 寿子  
金子 克

岩手医科大学歯学部口腔微生物学講座

我々は臨床材料から高分子量 dextran, あるいは sucrose による菌体凝集能欠損株を分離し, その諸性状を検討してきた。今回はこれら菌株の産生する Glucan を付着能の違いにより分画し, 定量を行った。合わせて G T F 活性の測定も試みた。使用菌株: D<sup>-</sup>S<sup>+</sup>, D<sup>-</sup>S<sup>-</sup> 株2株づつ, D<sup>+</sup>S<sup>-</sup> 株1株, 対照菌株として D<sup>+</sup>S<sup>+</sup> の性状を有する分離菌株3株と S. mutans の標準菌株 G S 5株を用いた。各菌体凝集能欠損株が産生する glucan を付着能の相違により分画してみると D<sup>-</sup>S<sup>-</sup> 株の産生する insoluble glucan 量は adherence, non adherence な画分共に他の菌株に比べ2~3倍多い。D<sup>-</sup>S<sup>+</sup> 株では adherence, non adherence な画分共に insoluble glucan 量は D<sup>+</sup>S<sup>+</sup> 株と同程度であった。しかし soluble glucan 量は著しく高く D<sup>-</sup>S<sup>-</sup>, D<sup>+</sup>S<sup>+</sup> の2.6~4倍近い値を示した。D<sup>+</sup>S<sup>-</sup> 株の insoluble, soluble glucan 産生量は共に非常に低い値を示した。

各菌株を BHI broth で培養し G T F 活性の測定を試みた。Extracellular G T F, Cell-associated G T F 活性共に D<sup>+</sup>S<sup>+</sup> 株のそれらと同程度の値を示し, 凝集能欠損株における G T F 活性の低下は認められなかった。以上の成績にもとづき菌体凝集反応と付着のメカニズムについて, 模式図を組み立てた。

質 問：伊藤 忠信（歯科薬理）

1) D<sup>-</sup>S<sup>+</sup> group と D<sup>-</sup>S<sup>-</sup> group とでは Glucan の生成量は同程度でしたか。

2) それは Receptor との間でどのような関係があると考えていますか。

質 問：川口 高樹（口腔生化）

1) Glucan の測定は定性、定量両面にわたって行ったのか。分子種の検討は行ったのか。

2) Sucrosetransferase の分子種は細胞に結合したものの、extracellular のものという以外の違いはないのか。触媒する結合様式に対する特異性はないのか。その点の検討はしているのか。

3) Str. mutans の中で菌体凝集能を有するもの、欠損するものとして、Glucan 合成において差は全く無いと判断してよいのか。つまり同一分子種を同量産生しているとしてよいのか。

回 答：演者

Sucrose 存在での GTF の測定は活性をやっておりますので、はっきりしたことはいえませんが、今回の BHI broth 培養での、D<sup>+</sup>S<sup>+</sup>、D<sup>-</sup>S<sup>+</sup> 菌株の GTF 活性に変化はみとめられず glucan 合成でも同じような結果を示したと思われま。

回 答：平田 佳子（口腔微生物）

1) GTF には Cell-associated GTF と extracellular GTF があり、従来から歯面への付着には Cell-associated GTF が重要であるといわれていたが、最近、渋谷ら（1978）は sucrose の存在で extracellular GTF が菌体表面に結合した glucan を合成しその glucan へ extracellular GTF アイソザイムが非特異的にイオン吸着し高い細胞結合性を与えることを報告している。

2) ここでいう insoluble glucan とは壁に付着したあるいは菌体に付着して培養上清中に存在する glucan を称した。凝集能欠損株が産生する glucan の詳細な定性は特に行っておりません。

演題 5 低年齢児におけるウ蝕罹患性に影響をおよぼす家族形態ならびに養育者について

・飯島 洋一、田沢 光正、宮沢 正人  
高江洲 義矩

岩手医科大学歯学部口腔衛生学講座

乳歯は萌出後の環境要因、時に甘味食品の影響を鋭

敏に受ける。これら嗜好食品が家庭の中でどのように与えられているか要因を分析し、指導方法を検討する必要がある。今回、演者らは基本的な養育環境である家族形態別ならびに養育者別のウ蝕有病状況について以上の関連を調査した。

調査対象は、花巻市湯本地区の乳幼児（6ヵ月～3歳未満）145名、滝沢村の3歳児68名。調査方法は、本年5月、歯科検診来所者全員に聞きとり調査を行った。受診率は湯本63%、滝沢83%であった。

結果：養育者別（母親、母親以外）のウ蝕有病状況は、deft index では1歳未満（0.0）1歳児（0.2, 0.2）2歳（2.4, 2.0）であり養育者による違いは認められなかった。一方、3歳児では（3.5, 5.9）と2歳以上の明らかな差が認められた。母親以外の養育者は、祖母・祖々母を含めて95%、以下祖父、父親の順であった。間食の内容は嗜好飲料として市販ジュース類が78.3%与えられていた。菓子は、含塩食品を与える家庭も多いが、種類としては、甘味食品が多い現状であった。

おやつについて家庭で困っていることは年齢とともに増加する。その内訳は、1歳未満では養育者側の課題として、祖父母・近所の人が与えてしまうが18.6%と最も高い値を示した。1歳では、養育者側（母親自身、祖父母が与えてしまう）31.9%、兄弟と同じものをほしがる21.7%、勝手に取り出して食べてしまう20.3%の順であった。2歳では、店頭ではしがる41.8%、勝手に取り出す41.8%と同率であった。3歳では、コマーシャルと同じもの26.2%やおまけつきをほしがる23.8%とマスメディアの影響が発現してくる。

今後、食品の摂取様式を行動科学的な面からアプローチすることが必要である。

質 問：野坂 久美子（小児歯科）

1) 養育者の平均年齢はどの位でしょうか。

2) このように養育者が違う事による Oral habit のようなものが見られたかどうか。

3) それに関して、その他情動的な面で変化はみられたかどうか。

4) 養育者が違う場合、口腔衛生指導はむずかしいと思われるが実際どのような方法で行っていますか。

質 問：工藤 啓吾（第一口外）

ウ蝕発生の要因は局所的と全身のとどちらがより強いのか局所的なら清掃指導を積極的にやらせれば良いように思いますが如何でしょうか。

質 問：飯田 就一（黒江歯科）

菓子類のテレビコマーシャルは子供心をあおり、一